

總持寺祖院蔵『住山記』について（1）

仏教文化研究所客員研究員 尾崎正善

研究生 武井慎悟

はじめに

總持寺所蔵『住山記』（以下、總持寺『住山記』と略す）に関しては、その所蔵史料の全てについて總持寺御移転百周年の記念出版として、翻刻紹介がなされている。これにより總持寺に瑞世した五万二千名にもおよぶ僧侶名、さらに瑞世の年月日・受業師・嗣法師・寺院名・出身地が明らかになった。

本論で取り上げる史料は、總持寺祖院に所蔵される『住山記』（以下、祖院『住山記』と略す）関連史料である。本史料に関しては、圭室文雄『曹洞宗大本山總持寺能登祖院古文書目録』「3. 瑞世・転衣 ホ 住山記」121頁（日本近代仏教史研究会・平成十七年三月）においてその存在がすでに知られていた。しかし、その詳細な紹介はなされておらず、既刊本の『住山記』との相互関係も未だ不明であった。さらに、「謚公文」（涅槃公文・山居公文）と記される公文の記録も、その詳細については不明であった。

今年度の史料調査により、その全てを撮影することができた。今後、順番に翻刻紹介することを予定している。それに先立ち、その全体像・分類・内容について紹介し、本史料に関する特徴や今後の課題・可能性について述べてみたい。

1. 特徴

まず、祖院『住山記』の特徴について述べてみよう。

1) 冊数

圭室氏の資料に基づく一覧表でも明らかのように、全体は39冊（綴）である。その内、22冊が所謂『住山記』で、残りの17冊が「謚公文」とされる。

実際に調査すると、40部に分かれ、袋詰めされていた。それは別表14の明治期の『住山記』が含まれていたからである。

さらに、その内容を詳細に検討すると、別表12-1、12-2、12-13は、一冊の冊子本であったものが、破損して3部に分かれたことが判明した。

したがって、別表にあるように『住山記』関係21冊、「謚公文」17冊となる。

2) 形状

形状は、總持寺『住山記』と同型式の折本形式と冊子本、仮綴本がある。

次に述べる分類と対応して確認すると明らかのように、正式な『住山記』と「謚公文」は折本、控え（写）と思われる記録が冊子本、そして抜き書きと思われる物が、仮綴じである。

3) 内容分類

以下の五種に分けられる。

①『住山記』

別表1～5の5冊。これは、總持寺所蔵の正本、もしくは破損後の修理本作成の後に破棄される予定のものと考えられる。折本形式で、丁寧な造りである。但し、總持寺蔵本とは、内容に大きな差異が確認できる本もある。今後の検討課題である。

②『住山記』の控え本

別表6～14の9冊。これは、おそらく控えとして作成されたものと考えられる。その理由は、形式がほぼ同一で、劣化も殆ど見られないからである。もしも、浄書前の原本と想定すると、江戸初期の寛永年間のものとは江戸後期宝暦年間のものとは形式・書体・書式がこれほど近似するとは考えられない。おそらく、江戸末期、もしくは明治時代に控えとして作成されたものと考えられるが、現時点では不詳。表紙には、三・四・八・中・乾・天と何らかの通し番号を想起させる記号が付されている。

なお、別表12は先に述べたように、破損し3部に別れた上、「12-1」の11紙の順番は順不同で収蔵されている。

別表14に関しては、明治41年のもので、控えとするには問題があるが、折本ではないので、ここに分類した。本史料は、翻刻作業を行っていない近代史料であり、貴重である。

③関東（武州）僧侶の抜書き

別表15～21の7冊。当初、世代数が飛び飛びなので記載内容が不明であったが、出身寺院をみると「武州」に限定していることが判明した。ただし、別表15は、広範に関東地区のようで、相州・上総・上州などの地名も確認できる。別表16以降は、「武州」限定である。

なお、總持寺『住山記』と比較すると、一代間違え他国出身の僧名を記す例も確認できるので、原本からの抜き書きと考えられる。なぜこのような控えを作成したか、現時点では不明である。

また、7冊と便宜的に分けたが、本来は1冊もしくは数冊であった可能性もある。

④「諡公文」

別表22～30の9冊。前住職の公文であり、「諡公文住山記」と題される。「諡公文住山記」は、先住涅槃後に賜ったもの。その際、近隣の寺院の証文が必要であったことが確認できる。

⑤「山居公文」

別表31～38の8冊。首座公文の名簿であり、「山居住山記」と題される。賜った際に拝登しなかった例も確認できる。上記で触れた「諡公文」も含め、公文の種類に関しては、栗山泰音『總持寺史』に指摘されている。これについては、後に述べる。

4) 掲載人数

以下、掲載人数である。但し、破損・劣化、さらに世代数はあるが僧名が記されていない例や墨で消去したものなども確認できるので、最終的な数ではない。

①『住山記』

別表1～5の5冊だが、別表1・2は世代の記名がなされていない部分が多くある等、正確な数が測りにくいいため除外した。したがって別表3・4・5の三冊で、合計292名である。

②『住山記』の控え本

別表6～14の9冊。1997名。

③関東（武州）僧侶の抜書き

別表15～21の7冊。563名。世代数が切れ切れであり、さらに破損箇所も有るため、最終的な人数とは言えない。

④「謚公文」

別表22～30の9冊。1302名。但し、消去した名前も何人か確認出来るので、最終的な人数とは言えない。

⑤「山居公文」

別表31～38の8冊。2105名。但し、こちらも消去した名前も何人か確認出来るので、最終的な人数とは言えない。

2. 謚公文について

祖院『住山記』で注目すべきは、「謚公文」と呼ばれる名簿である。

この公文の存在に関しては、『總持寺史』「第二篇・出世史、第二節・總持寺出世官金と公文請状の判形」（235頁）に以下の様にある。

總持寺に於ける公文の種類は転衣公文、再公文、涅槃公文、首座公文の四種であって、その官金にも判形にも、みな一定の定額と規式がある。（中略）

転衣公文は別に説明を要しない。再公文とは五院輪住のときもし永平寺で転衣した人ならば總持寺再住とならぬから、転衣成直の法式を勤めて初住の公文を受けることである。涅槃公文は立職長老没後の和尚号であることはいふまでもない。首座公文は未立職の平僧が首座位を得るいはゆるの山居公文である。

こうした公文制度の実際を名簿として示してくれたのが、今回の史料といえる。その詳細な内容、僧侶がどのような手続きを行ったかについては今後の課題としたい。

おわりに

以上、祖院『住山記』の紹介を中心にその概略のみを述べてみた。今後の課題としては、「謚公文」を主に翻刻紹介を行い、その特徴・傾向、問題点などを明らかにする予定である。

また、總持寺『住山記』との相互関係について、詳しい比較検討を行いたい。祖院『住山記』は、写しが主ではあるが、總持寺『住山記』を補う点も考えられる。本史料活用の可能性について指摘し、終わりとしたい。

總持寺祖院藏『住山記』

凡例

1. 祖院藏『住山記』の一覧表である。
1. 最初の番号は、今回新たに付した通し番号である。
1. 「圭番」の項目は、圭室文雄『曹洞宗大本山總持寺能登祖院古文書目録』
「3. 瑞世・転衣 ホ 住山記」121頁（平成十七年三月）を参照したもの。
1. 「表題」の項目は、文書の表紙に附せられている文言を記した。表紙の状態も（破損）等、記した。表紙がないものに関しては、（仮）とつけることで区別した。
1. 「人数」の項目は、通し番号1、2に関しては世代の記名がなされていない部分が多くある等、正確な数が測りにくいいため除外した。
1. 「世代」の項目では、「謚公文」「山居公文」には文書の性格上、世代数が書かれないため空白となっている。なお、世代数が記されるものでも、所々飛んでいる世代も存在する。
1. 「備考及び總持寺『住山記』との関係」の項目には、各文書の表紙に書き付けてあったものを示し、總持寺『住山記』との関係が明らかかなものは適宜記入した。通し番号や記号については「③」や「(中)」と表記した。

番号	圭番	表題	冊数	見返題	表装	法量 (縦×横)	丁数
1	1	住山記	一冊	諸嶽山總持禪寺住山記妙高菴派	紙表装、折本	32.4×18cm	七六折
2	2	住山記	一冊		紙表装、折本	33.4×21.5cm	四九折
3	4	住山記	一冊		紙表装、折本	36.3×19cm	六折
4	5	住山記	一冊		紙表装、折本	32.2×21cm	二三折
5	7	住山記	一冊		紙表装、折本	34×20.5cm	八折
6	6	住山記	一冊		紙表紙、袋綴	27.8×20cm	七八丁
7	8	諸嶽山(破損)	一冊		紙表紙(破損)、袋綴	24×17.5cm	五八丁
8	11	住山記	一冊		紙表紙、袋綴	24.7×18cm	一七丁
9	20	諸嶽山惣持禪寺住山記	一冊		紙表紙、袋綴	24.1×18.5cm	三四丁
10	24	諸嶽山惣持禪寺住山記	一冊		紙表紙、袋綴	24.9×18.5cm	三八丁

總持寺祖院藏『住山記』について（1）

掲載年次	人数	世代	書写者	備考及び總持寺『住山記』との関係
慶長九(1604)年八月～ 元和三(1617)年八月 六日		2579～ 3033世	越州心月義天長文 叟代改旃	新冊二写替不用分根本 也(表紙)。巻6(2579b ～2866)巻7(2867～ 3033)總持寺本と同一
元和四(1618)年九 月二十七日～寛永五 (1628)年五月二十九日		3034～ 3421世		二重違名不審(表紙)。巻 8(3034～3393)巻9(3394 ～3895)の一部、總持寺 本と誤差多し。巻8と巻 9に該当するが、本史料 の3034世は、總持寺で は3047世、最後の3421 世は3490世に当る。途中、 未記載の部分も多い。
寛永九(1632)年～寛 永十(1633)年	43	3990～ 4033世		新冊二写替不用分根本也 (表紙)。巻10(3900～ 4430)總持寺本の一部
寛永十七(1640)年 二月九日～寛永十八 (1641)年六月一日	176	4431～ 4614世		新冊二写替不用分根本也 (表紙)。巻11(4431～ 4784)總持寺本の前半一 部
正保四(1647)年八 月二十四日～慶安元 (1648)年五月二十八日	73	5012～ 3033世		新冊二写替不用分根本也 (表紙)。巻12(4785～ 5245)總持寺本の後半一 部
寛永二十二(1645)年 二月十六日～慶安二 (1649)年七月八日	461	4785～ 5245世	無端流之代維那林 茂(表紙)	③(表紙、通し番号)。 巻12(4785～5245)總 持寺本と同一、冊子本
慶安二(1649)年七月 十七日～慶安四(1651) 年十一月二十九日	247	5246～ 5592世	太源派(以下欠損) (表紙)	④(表紙、通し番号)。 巻13(5246～5592)總持 寺本と同一、冊子本
明暦四(1658)年四月 二一日～万治二(1659) 年正月十六日	98	6363～ 6460世		⑧(表紙、通し番号)。 巻16(6166～66459)總 持寺本の後半、冊子本。 世代が一つずれる。總持 寺『住山記』は6114世 を二回記録するため
正徳二(1712)年十月 十三日～正徳三(1713) 年七月一日	208	14325 ～ 14352 世	洞川庵派代維那夏 代昌泉寺千寧寺 (表紙)	(中)(表紙、通し番号)。 巻48(14325～14352)總 持寺本と同一、冊子本
享保二(1717)年五月 十五日～享保三(1718) 年四月十四日	228	15616 ～ 15843 世	妙高夏代維那法幢 寺(表紙)	(乾)(表紙、通し番号)。 巻54(15616～15843)總 持寺本と同一、冊子本

番号	圭番	表題	冊数	見返題	表装	法量 (縦×横)	丁数
11	31	住山記	一冊		紙表紙、袋綴	24.6×18cm	五一丁
12-1	32	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	23.9×18cm	一一丁
12-2	39	住山記抜書 (仮)	一紙		表紙なし	23.9×36.5cm	一紙
12-3	34	住山記抜書 (仮)	一冊		表紙なし、袋綴	23.7×18cm	一五丁
13	35	住山記	一冊		紙表紙、袋綴	24.4×18cm	四四丁
14	*	住山記(仮)	一冊		表紙なし、袋綴	28×20cm	四丁
15	3	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.9×18cm	三二丁
16	9	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.8×17.5cm	二丁
17	10	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.8×17.6cm	七丁
18	12	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.7×18cm	十丁
19	15	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.7×18cm	二丁
20	19	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.7×18cm	二二丁

總持寺祖院藏『住山記』について（1）

掲載年次	人数	世代	書写者	備考及び總持寺『住山記』との関係
寛延四(1751)年三月二十一日～宝暦二(1752)年八月十四日	300	22403 ～ 22702 世		(天)(表紙、通し番号)。卷78(22403～22702)總持寺本と同一、冊子本
宝暦五(1755)年三月二十七日～八月二十一日	66	23273 ～ 23383 世		卷81(23273～23532)總持寺本の前半、冊子本
宝暦五(1755)年四月十八日～四月二十二日	6	23305 ～ 23320 世		卷81(23273～23532)總持寺本の一部、12-1の一部(23315の誤り)
宝暦六(1756)年三月十五日～九月三日	89	23444 ～ 23532 世		卷81(23273～23532)總持寺本の後半、冊子本
宝暦六(1756)年九月二十四日～宝暦八(1758)年三月五日	263	23533 ～ 23745 世		卷82(23533～23745)總持寺本と同一、冊子本
明治四十二(1909)年五月八日～六月二十日	31	56253 ～ 56283 世		翻刻作業なし
元和八(1622)年四月八日～慶安三(1650)年九月	243	3112～ 5531世		冊子(一紙) 関東(武州・上総・上州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。
慶安四(1651)年九月四日～承応三(1654)年八月十三日	16	5543～ 5996世		冊子(一紙) 武州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。
承応三(1654)年九月十八日～寛文三(1663)年六月六日	56	6017～ 6971世		冊子(一紙) 武州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。
寛文三(1663)年八月十七日～延宝六(1678)年二月一日	77	7020～ 8696世		冊子(一紙) 武州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。
元禄三(1690)年二月二十六日～九月二十五日	11	10020 ～ 10488 世		冊子(一紙) 武州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。
正徳二(1712)年三月十日～享保三(1718)年三月四日	130	14157 ～ 15739 世		冊子(一紙) 武州(国別)控え。世代数は所々飛んでいる。

番号	圭番	表題	冊数	見返題	表装	法量 (縦×横)	丁数
21	30	住山記抜書 (仮)	一冊		破損(表紙なし)、袋綴	24.4×17cm	四丁
22	13	謚公文住山 記	一冊		紙表装、折本	36.5×19.5cm	二二折
23	14	謚公文住山 記	一冊	諸嶽山總持禪寺涅槃後住山記	紙表装、折本	35.8×20cm	四二折
24	17	謚公文住山 記	一冊		紙表装、折本	37.4×20cm	一六折
25	21	謚公文住山 記	一冊		紙表装、折本	35.6×19.5cm	六折
26	23	謚公文住山 記	一冊		紙表装、折本	37.7×20cm	二二折
27	27	謚公文住山 記	一冊		紙表装、折本	37.2×20cm	一三折
28	26	謚公文住山 記	一冊	諸嶽山總持禪寺涅槃後住山記	紙表装、折本	37.3×19.5cm	二二折
29	29	謚公文住山 記	一冊	諸嶽山惣持禪寺涅槃後住山記	紙表装、折本	36.9×19.5cm	四〇折
30	38	謚公文	一冊		紙表装、折本	34.3×20cm	二二折

總持寺祖院藏『住山記』について（1）

掲載年次	人数	世代	書写者	備考及び總持寺『住山記』との関係
寛延四（1751）年六月二十五日～宝曆二（1752）年九月六日	30	22457 ～ 22823 世		冊子（一紙）武州（国別）控え。世代数は所々飛んでいる。
寛文十（1670）年八月十二日～延宝七（1679）年五月二十一日	135			
延宝八（1680）年三月二十四日～元禄十七（1704）年三月二十一日	257		無端派夏代維那白元（見返）	
宝永三（1706）年三月九日～正徳四（1714）年二月十八日	113			表紙に「宝永元（1704）年四月十六日～正徳四（1714）年二月十八日」とあるも、前欠にて宝永三年三月九日から
正徳四（1714）年二月二十八日～正徳六（1716）年二月九日	39			
正徳六（1716）年四月十九日～享保十三（1728）年三月十二日	138			
元文六（1741）年二月二十八日～延享二（1745）年十月十七日	73			
享保十三（1728）年三月十九日～元文五（1740）年五月一日	135		伝法菴夏代維那千寧寺（見返）	
延享三（1746）年二月十一日～安永三（1774）年八月七日	234		如意庵夏代維那青陽軒（見返）	表紙に「寛文十年ヨリ安永三年マテ都合八巻也、天保四巳五月改置」とあり。
天保六（1835）年三月十九日～元治二（1865）年四月二十一日	178			

番号	圭番	表題	冊数	見返題	表装	法量 (縦×横)	丁数
31	16	山居住山記	一冊		紙表装、折本	33.6×20cm	一九折
32	18	山居住山記	一冊	能州諸嶽山惣持禪寺山居住山記	紙表装、折本	37×20cm	一二折
33	22	山居住山記	一冊	諸嶽山惣持禪寺山居住山記	紙表装、折本	36.6×20cm	三一折
34	25	山居住山記	一冊	諸嶽山惣持禪寺山居住山記	紙表装、折本	37×20cm	三八折
35	28	山居住山記	一冊	諸嶽山惣持禪寺山居住山記	紙表装、折本	35.5×20.5cm	二八折
36	33	山居住山記	一冊	諸嶽山惣持禪寺山居住山記	紙表装、折本	36.3×20cm	四五折
37	36	山居住山記	一冊		紙表装、折本	36.8×20cm	五六折
38	37	山居號貽公文 (破損)	一冊		紙表装、折本	34.4×19.5cm	三五折

總持寺祖院藏『住山記』について（1）

掲載年次	人数	世代	書写者	備考及び總持寺『住山記』との関係
元禄十三（1700）年五月二十日～宝永三（1706）年二月	114			
宝永三（1706）年八月十二日～正徳六（1716）年二月二十七日	100			
正徳六（1716）年三月三日～享保十二（1727）年三月二十九日	248		如意庵夏代維那青陽軒（見返）	
享保十二（1727）年四月七日～延享元（1744）年十二月二十日	305		妙高菴夏代維那永壽院（見返）	
延享元（1744）年十二月二十日～宝暦五（1755）年五月八日	222		洞川庵夏代維那東源寺（見返）	
宝暦五（1755）年八月十日～安永二（1773）年三月十日	359			
安永二（1773）年二月十七日～寛政八（1796）年八月二十二日	447			表紙に「安永二三月十二日ヨリ寛政八八月廿二日マテ」とあるも、見返に二名加筆あり。「二月十七日」より。
天保六（1835）年二月七日～慶応元（1865）年五月十一日	310			